

新世界

長野まゆみ



CYRILLUS RHEITA ZAGUT BLANCANUS BAILLY GASSENDI FIRMICUS GAUSS
HAHN LINNE PICARD BLANCANUS BAILLY GASSENDI KLAPROTH
PIAZZI RHEITA ZAGUT BLANCANUS BAILLY GASSENDI FIRMICUS GAUSS
SOUTH BURG MASKELYNE RITTER ROMER UKELT EULER PPYTHEAS HANSTEEN

しん せ かい
新世界
4th

長野まゆみ
Mayumi Nagano

初版印刷／1998年4月15日

初版発行／1998年4月24日

発行者／清水勝

装 画／長野まゆみ

装 丁／泉沢光雄

発行所／河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷 2-32-2 〒151-0051

電話 03(3404)1201

印刷 大日本印刷株式会社

振替 00100-7-10802

製本 加藤製本株式会社

定価はカバー・帯に表示してあります。

乱丁本・落丁本はお取替えいたします。

©1998 by Mayumi Nagano. Printed in Japan. ISBN4-309-01211-6

新世界

4th



夜間授業の終鈴^{ベル}が静かに鳴り、廊下に響く生徒の足音はいつせいに玄関へ向かった。校舎の地階にある医局で校医をするソレンセンも、勤務を終える時刻だった。しかし、彼は帰り仕度をせず、しばらく事務机にとどまっていた。目を通すべき書類や、医療局^{オス}への報告書はすべて片づいている。彼は椅子の背へ軽くもたれ、しばらく考えごとに没頭した。

イオの覚醒が遅れている。その一方で、彼の運動機能は本人の手にあまるほど急速に高まり、シュイに重傷を負わせる結果をまねいた。覚醒の遅れは、イオの軀^{からだ}に微妙な狂いが生じたためで、ソレンセンが密かに恐れていた者の存在を証してもい

る。その人物の発するパルスが、イオに影響をあたえるのだ。

……誰だ、

母星化^{フオースティング}によつて、本来あるべき機能を失つたソレンセンは、自らを脅かし、イオの覚醒に微妙な狂いをおよぼす人物のパルスを察知できなかった。その人物は、まぢがいなく彼らのひとりであり、ソレンセンの素性を知れば、彼が過去に犯した裏切り行為を、殺戮^{きつりく}で清算しようとするはずだった。

彼らとは、高度な身体機能によつて永い眠り人となるのを免れ、母星系種族にまぎれこんだラシートの女である。《融合》の機能を持つ彼らは、外見も思考パターンも、そっくり擬態^{ぎたて}している。今のソレンセンが彼らの本性を見抜くのは、ほとんど不可能に近い。わずかに分があるとすれば、母星化^{フオースティング}を受けたソレンセン自身にも本来のパルスがなく、すべて医療局^{オクス}に制御されている点だった。だがそれは、たんなる「母星系の男」と成り果てたソレンセンが、かつての能力を持たない証しでもある、ともかく今は、イオの覚醒を待つほかはなかった。

ソレンセンはキチネットへ行き、薬罐^{やかん}に電熱棒を差しこんだ。校舎の内は静けさに充ちている。保健婦も、夜間部を担当するほかの教職員も、次々に退出し、生徒

たちのざわめきも今は聞こえない。ソレンセンは珈琲を淹れるつもりだったが、あいにく豆を切らしていた。呑むのをやめるか、薫茶にするかを選ぼうとしていた矢先、来訪者を示す表示燈が点った。保健婦はすでに帰宅しているため、ソレンセンは自ら受付へ出向き、そこで、ジャウの姿を見つけた。

「如何ですか、」

だしぬけに訊いて、ジャウはフリシアの薫りを濃く匂わせた袋を差し出した。幾何学もようの網が、優美に動く肢体を包んでいる。片腕に抱えた檻樓を、扉の傍へおいて室内へはいってきた。檻樓は、彼をありふれた亜人に見せるための小道具である。ふだんはそれをまとい腰を屈め、人の目を欺いていた。

ジャウが室内を歩くにつれ、いつも彼が匂わせている橄欖ではなく、手にした袋から一風変わったフリシアの蜜の匂いが漂った。はじめは橙柑の果実を思わせる酸味が強く薫り、拡散するにつれ甘い匂いに変化してゆく。

「手配はできたのか、」

「ご指示どおり。あとは私がイオと接触すればいい。彼はどうせまっすぐに家へは戻らないでしょうから、急がなくても平気です。」

「エヴァは、どうしてる、」

「観光局にいます。私がイオに接触すれば、必ず動くでしょう。彼女はすでに密偵を闇市に放ったはずです。」

「……扱いやすい女だな、」

ジャウはうなずき返して、キチネットへ歩みよった。湯気をたてる菓罐の電熱棒を抜き、ソレンセンに代わって珈琲を淹れる。袋の封を切ったとたん、あたりが濃やかな蜜の匂いに充ちた。その珈琲豆は、焙煎ばいせんのさいに白いフリシアの花で薫りをつけたものだ。フリシアは、ふつう暗紫色の花として知られるが、数年に一度だけ白い花を咲かせた。べつの花のように小ぶりで、蜜も薫りも暗紫色のフリシアとは異なっている。

もともとは水辺を好む母星系の植物で、乾燥した沙丘さきゅう地帯では一年草となることが多い。そのため、白い花は滅多に見られず、この蜜の匂いがする珈琲豆は、稀少価値があった。ソレンセンが好むのを、ジャウは承知している。しかし、その嗜好がいつどうしてはじまったのかまでは知らなかった。

ジャウが珈琲を淹れるあいだ、ソレンセンは事務机に向かって、片づけてあった

書類にもう一度目を通した。学校内にいるとき、彼は徹底して校医としての顔を貫いている。マザーワートの機関構成員である気配は、微塵も見せない。勤務態度は、保健婦や生徒たちが寡黙でもの静かな医師と判断するに足るものだった。

彼は、ジャウが手もとにおいた珈琲を一瞥し、手にとつてひと口呑んだ後は、なんの態度もあらわさずに黙りこんだ。フリシアの白い薔が浮かんでいることさえ気に留めるふうもない。所在なく書類をめくる音だけが聞こえた。

「お気に召しませんか、」

ジャウは、キチネットを手早く片づけながら訊いた。

「亜人のきみが、なんでそんなことを気にかけるんだ、」

「……べつに他意はありません。抽出の方法が不巧かったかと思っただけです。」

ジャウは自分では珈琲を吞まず、事務机へ就くソレンセンの背へ軽く一礼して診察室の扉へ向かった。ソレンセンは不意の訪問を好まない。ジャウはそれを承知で医局へ寄つたのだが、珈琲を淹れる時間以上に長居するつもりもなかった。扉をあけた彼の背後で、ソレンセンは机へ向かうのをやめ、椅子を半回転させた。

「何か、用があつて来たんだろう、」

「もう、いいんです。……たいした用ではないような気がしてきました。」

「それなら、べつに引き止めないが、」

このところ、ジャウはソレンセンの指令に迷いがあると感じていた。標本^{サンプル}の変化が思わしくなかったためだが、末端の機関^{メカニカル}構成員^{メンバー}であるジャウには、ソレンセンが医療局^スの上層部とどんな軋轢^{あつれき}を持って任務に就いているのか、想像でしかわからない。

ただ、シユイにたいするソレンセンの態度には、不可解な点が多すぎた。医療局^スが重要視する標本^{サンプル}だというだけでは、説得力に乏しい。殺してほしいとまで云わせるほど、シユイにあたえるストレスは過剰だった。結果に不満足なら、彼を見切つてほかの標本^{サンプル}を求めればすむ話だ。だが、ソレンセンはそうしない。

「珈琲を呑んだらどうだ、」

促されて、ジャウは診察室へ戻った。机へ背を向けたソレンセンは、椅子の脇掛^{ひじか}けへ軽く腕をのせ、床へ埋めこまれた表示燈^{バイロット}のあたりへ視線を落としている。ときおり、もう一方の手に持った茶碗^{カップ}を口へ運んだ。ジャウは扉口へたたずみ、しばらくソレンセンの様子を見据えていた。この医師は、ありのままの感情を面^{おもて}にあらわさない。憂いや悩みがあるとしても、それを第三者に悟らせはしなかった。

殻シェルによってシユイに手酷ひどい損傷ダメージをあたえたイオのふるまいが、ソレンセンにも予想外だったことは、その後の真剣な治療にあらわれていた。身体座標フィスグラフの数値以上に運動機能が高まっていたイオは、些細いさかな諍いさかいでシユイを攻撃し、瀕死の状態へ追いやった。それを救ったのはソレンセンであり、彼の手腕がなければできない治療だったのである。幸い、シユイは蘇生したが、ソレンセンは安堵する様子も見せず、依然としてストレスを加えつづけている。

ジャウは、頭を蔽おほった布を剥はいでソレンセンに歩み寄り、軀からだを傾けて接吻した。彼としては身分照会以上の意識を持っていたが、ソレンセンはふだんどおり隙のないう態度でそれを受けた。避けも退けもしないかわり、体温を確認する以上の反応も示さない。

「ひとつ、お訊きねしてもよろしいですか、」

「訊くのは勝手だ。いちいち断らなくてもいい。」

ジャウはすぐには訊ねないで、キチネットへ珈琲を注ぎに行った。ソレンセンの冷淡な態度は今さらはじまったわけではない。ジャウも馴らされていたし、情緒的な感覚に乏しい亜人の特徴として、心に傷を負うわけでもなかった。だが、シユイ

との関わりは、ジャウに微妙な変化をあたえた。蜂蜜^{ハミ}を交流するたびに、シュイの憂愁や鬱積までもがジャウの躰へ流れこんだ。

亜人^{アジャン}の大半は、感受性に乏しく、喜怒哀楽を理解するほど情緒面で発達していなかった。しかし、ジャウは生粹の亜人ではない。シュイの呼吸や鼓動とともに心の動揺をも感じとり、少なからず影響を受けた。シュイの躰は、声なき叫びを宿している。その叫びは、棘^{とげ}のようにジャウの躰にも刺さり、小さな疵^{きず}をつくった。そこから少しずつ、閉ざされていた彼の記憶が洩れている。ジャウは、それまで気にもとめなかった過去の暮らしを、ときおり思い出すようになった。

「あなたは、どうして私のような者を蜂^ルの巣^{シエ}から拾ったんです、」

「今さら、そんな質問に答える必要があるのか、」

「私は、性別シフトが未発達だった子どものころ、ある男に連れられてこの領域^{テリトリー}へ来ました。その後、蜂^ルの巣^{シエ}へ捨てられたのですが、いつしか男のことなど、すっかり忘れ去っていました。ごく最近、ほんの偶然からその男と再会したのです。容姿や声に覚えはありませんでした。というのも、子どものころの私は身体機能が未熟で、視力や聴覚がほとんどなかったからです。手脚もあまりよく動きませんでしたし

た。でも、男を間近にした瞬間に、ある特徴から彼だと解りました。……匂いです。」

「……匂い、」

「ええ、以前は嗅覚も正常ではなかったはずなのに、憶えていました。むろん、このフリシアの薫りとは次元の異なる匂いです。記号のようなものだ。唇で体温を識る身分照会よりも、もっと確実で、人工的な作為のおよばない匂いです。その匂いで、かつての男と再会したのだと解りました。……先刻、ふとその男のことを、あなたの耳に入れておくべきではないかと思つたのです。」

「脈絡のない話だな。男と私にどんな関連があるんだ。私は知能の高さを買つて、きみを蜂の巣から拾つたんだ。あの頃のきみは、すでに目も見え、耳も聞こえていた。もとより素性は問題にしていなない。」

「……あなたは、母星化を受けておいでだ、」

ジャウの不意を突いた発言にも、ソレンセンは動揺を見せなかった。冷静に、目の前にいるジャウを見据えた。ソレンセンの淡青色の眼球は、心理状態や意識とは無縁の複雑なパターンを持ったパルスを放っている。《本物》でないそれは、相手

の触覚機能フアンテナを惑わす遮蔽装置しよへいでもあった。

「話の要点が、わからないな。」

「ソレンセン、あなたも同じ匂いをするんだ。ただ、男と再会するまでは、私もそれが匂いだとは気づきませんでした。たんなる薰りではないからです。あなたの場合、男よりずっと淡い匂いうすがする。でも、性質は同じなんです。」

ソレンセンは、かすかに笑い声を洩らした。

「要するに、きみは私の素性を怪しんでいるわけだ。以前からそうだったな。母星系種族ではないと云いたいんだろう。ならば訊くが、母星化フオ之星化を受けているとして、私はいったいどの種族に属するんだ、」

「ラシートです。」

確信に満ちたその答えは、先ほどから努めて冷静にふるまっているソレンセンには救いだった。ジャウは、その言動でソレンセンに衝撃をあたえたほどには、真実を理解していない。匂いを識しる機能が、どれほど重要な意味を持つか、少しも自覚していなかった。

「匂いが種族の記号だと云うなら、きみをこの領域テリトリイへ連れてきた男もラシートな

んだろう。どこで再会したのか知らないが、医療局^{オス}はなんでその男を見逃しているんだ。ラシートはひとり残らず収容施設にいるはずぢやないか、」

「男はマザーワートにいます。彼も母星化^{フォーミング}を受けているのでしよう。……あなたと同じで、外見は母星系の男にしか見えません。」

「それならば、どうしてラシートだと解るんだ、」

「……男は、躰の中にゼルを持つているんです。未登録のゼルで、医療局^{オス}のリストにはない。だから、機関構成員^{メカニカル}にも見つからない。でも、そのゼルに私の躰が反応しました。パルスが同調したのです。」

「私は、ゼルなど持つていない。」

「でも、匂いがある。」

「では訊くが、きみの云うそれがラシートの匂いなら、収容施設の患者たちはどうなんだ。あれらは皆、まぎれもないラシートだ。彼らも、匂うのか、」

「……いいえ、」

収容施設のラシートに匂いがない理由を、ジャウも自分なりに考えてはみたが、答えはまだ得られなかった。しかしそれは、ソレンセンをラシートではないと判断

する決め手にもならない。

「それで、このくだらない話は、いつまで続くんだ、」

椅子を立ったソレンセンは、茶碗^{カップ}をキチネットへ片づけた。だが、冷ややかな態度には理由があつた。彼の母星^{フォロミシング}化された躰は、もはやジャウの云う匂いを自覚することすらできなくなっている。彼を危うくする事態が迫つていても、それを防ぐ手立てがなかった。

「……男が誰か、お訊きにならないんですね、」

フリシアの薫りは薄らいで、代わりにジャウの衣裳^{カシラシ}が橄欖^{カシラシ}の匂いを漂わせた。長く伸ばした榛色^{ヘイゼル}の髪は絹衣^{シルク}に浮かぶ蔓草^{つるくさ}の渦とからみあうように背を包んでいる。亜人と思えるのは肌の色合いだけで、それはジャウの美しさの一部でもあつた。彼は、その美貌の価値に気づいていないのとひとしく、特殊な機能を身につけているとの自覚もない。口ぶりがそれを示していた。

ソレンセンは、診察室の中ほどへたたずんでいるジャウに近づき、彼の躰を抱きよせて接吻した。そうしていても、母星^{フォロミシング}化を受けているソレンセンは、もともとの種族としての快楽は得られない。だが、母星系の男として身分照会の範囲を超える